
唯一無二の王

白迅狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯一無二の王

【Nコード】

N0085Q

【作者名】

白迅狼

【あらすじ】

私が無意識の内に童話っぽく書いてしまったよく分からないものです。長さも短編としていますが若干長いです。正直駄文ですので駄文が嫌だという方は通り過ぎることをお勧めします。

(前書き)

このような駄文を見に来ていただきありがとうございます

今回の投稿が私の初めての作品ですので本当に駄文です

最後の確認です、駄文が嫌だと言う方は読まないことをお勧めします
作者自身、一体何が書きたかったのかが分かっておりません

それでも良いという方はお進みください

ある所に小さな国がありました

その国は小さくとも笑顔にあふれていました

しかし、そんな国でも一つの不安がありました

その国は何も出来ない王様が治めていたのです

何も出来ず、ただ笑顔で居るだけの王様です

なのでいつも国民たちに無能だと言われていました

それでも王様から笑顔が消えることはありません

しかしそんな笑顔のあふれた日々は突然に別れを告げました

いつも笑顔だった王様からも笑顔が消えました

近くの大きな国がその小さな国に戦いを挑んできたのです

相手の数は自分たちの3倍はあります

小さな国はたった一人を除いて勝ち目がないと戦う前から諦めていました

その一人とはあのいつも笑顔だった王様でした

しかし、その時の王様に笑顔はなくその目には覚悟があふれていました

戦いが近くなったとき王様は国民に向けて言いました、

「相手は確かに大きな国だ、だが戦う前からあきらめてどうなる？

皆が戦わなくとも、私一人だったとしても私は戦い抜いてみせる」と

「王様はなぜ諦めずに戦えるのですか？怖くはないのですか？」

国民の一人が王様に聞きました

王様はこう答えました

「確かに私一人なら諦めていただろう

だが私が戦うことで少しでもお前たち国民が救えるなら、怖くはない」と

「私たちはいつも王様を悪く言っていました

それなのになぜ王様は私たちのためにそこまでするのですか？」

今度は別の人が王様に聞きました

王様はその人にはこう答えました

「お前たちの言っていたことは事実だ

言われないようにしなかった私が悪いのだ」

「それに国民を王が守るのは当然のことだ

王あつての国ではないのだ

国民あつての国であり、国あつての王なのだからな」

そういうと王様は戦いに向かいました

たった一人で国民を守るために

ただ一人戦いについた王様は敵を倒していきます

王様はその場で誰よりも強かった、力だけでなくその心も

しかしそんな王様にも限界が近づいてきます、しかし王様は諦めません

倒れるわけにはいかない、と傷つきながらも多くの敵を倒していきます

そんな王様を見て、諦めていた国民たちの胸にある思いがわき始めました

それは「王様と共に何かを守るために戦いたい」という思い

そして国民の誰かがいました

「王様は自分たちを救うために命をかけるつもりだ

なのに自分たちはなんだ、何もせずただ見ているだけではないか

王様が私たちを守るために戦うのなら、私たちは王様を守るために戦おう!!!」

それを聞いた国民たちは武器を手にし、次々と王様の下へと向かいます

武器を手に戦いに向かった国民たちは驚きに目を丸くします

そこには王様が、剣が折れても鎧が砕けても諦めずに戦い続けていたのです

殆どの敵を倒し、傷つき満身創痍の体で叫びながら

「私は諦めるわけにはいかない!!! 私の後ろに守るべき国民たちが居る限り!!!」

その叫びが国民たちの思いをさらに強くし、王様と共に国民たちも敵を倒していきます

王様は驚きましたがすぐに国民に背中を預け敵を倒し始めます

そして王様たちは一つの犠牲を払い戦いに勝ちました、しかしその犠牲はとても大きなものでした

その犠牲とは国民を守るために戦った王様だったのです

傷つきながらも戦った王様は戦いが終わると共に倒れ

最後に一言「やっと王様らしいことが出来た」と残し

笑いながら息を引き取ったのでした

国民たちはひどく悲しみました、王様を守れなかったと

そして国民たちは王様のことを忘れないように町の中心にその王様の像を建てたのです

王様が大好きだったその町を見回すことができるように

そして、その像に名前が刻まれることはありませんでした

なぜなら、像の名前は王様の守った国民たちの胸に

消えることなくしっかりと刻まれているのですから

『諦めを知らぬ唯一無二の王』と

（後書き）

駄文を全て読んでくださった皆さん、本当にありがとうございます
感想や改善点がありましたら、報告して下さることを願います
突発的に書いたものですので最初で最後の作品かもしれません
がよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085q/>

唯一無二の王

2011年1月11日21時00分発行